

令和6年度人生100年時代シニア活躍推進県民会議

日 時 令和6年12月24日(木)
午後2時00分～午後3時00分
場 所 長野県庁 西庁舎110号会議室

1 開 会

○健康増進課 高山企画幹

それでは定刻になりましたので、ただいまから「令和6年度人生100年時代シニア活躍推進県民会議」を開会いたします。私は長野県健康福祉部健康増進課の高山と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

2 内 容

(1) 人生100年時代シニア活躍推進事業について

○健康増進課 大澤主事

改めまして、皆様よろしくお願いたします。健康増進課の大澤と申します。

人生100年時代シニア活躍推進事業について、説明させていただきます。一昨年まで、人生二毛作社会推進事業という事業名で行っていたんですけども、昨年度から、人生100年時代シニア活躍推進事業として、人口減少ですとか少子高齢化が加速する中、シニアの多様な活躍を推進することを目指して本事業を推進しております。

本事業は、シニア世代が培ってきた知識や経験を社会参加で生かして、地域で様々な活躍ができるような体制づくりを行うものになっております。

事業名を変更することになった1つのきっかけとして、ライフスタイルの変化があります。これまでの教育を受けて、仕事をして引退した後、第二の人生を歩むという単線型のライフスタイルから、現在では教育を受けるところから平行して、様々な活動を行える社会に変化してきておりまして、人生の選択肢の幅が広がっております。この新しいライフスタイルに沿った事業名として、「人生100年時代シニア活躍推進事業」に変更しております。

次のスライドです。本事業の背景といたしまして、こちらの資料は、日本の人口推移と将来設計になっております。棒グラフが人口、折れ線グラフが人口割合を示しておりまして、青色が生産年齢人口、黄色が65歳以上の人口を表しております。

生産年齢人口が減少を続けるにもかかわらず65歳以上の高齢者が減少しない見込みですので、高齢化率は上昇を続けまして、2036年には日本の3人の1人が高齢者になると推測されております。さらにそこから高齢化が進みまして、2050年には約2.6人から2.7人に1人が高齢者になる社会が到来すると見込まれております。

次のスライドは、長野県の人口推移と将来設計についてです。長野県の2023年の高齢化率は、32.7%で全国第20位になっておりますが、そこからさらに高齢化が進みまして、令和6年度版の高齢社会白書によりますと、2050年には高齢化率が41.6%になり、全国第16位になる見込みです。全国的に見ますと、長野県は若干全国的に速いペースで高齢化が進んでいることが分かります。

次に、高齢化率の高い長野県なんですけども、平均寿命が長いことはここ最近でよく知られていることでもあります。加えまして、要介護度を基に算出される、日常動作が自立している期間の平均、いわゆる健康寿命が2年連続で男女ともに全国1位になっております。男性に関しまして

は2年連続で1位、女性に関しましては7年連続で1位になっております。

健康増進課では、世界一の健康長寿を目指す取組として「信州ACEプロジェクト」という主に運動・検診受診・食事という観点から健康づくりを啓発する県民運動を推進中でありまして、そういった働きかけもこのような結果の一員になっているのかなと思います。

次に高齢者の社会参加活動や仕事への参加頻度ということで、こちらのスライドなんですけども、本事業では高齢者の社会参加という点に焦点を当てて取り組んでおりますが、グラフにある5つの活動のそれぞれについて、活動をしていないと答えた人の割合が4割を超えております。参加していると答えた人が最も多いのが⑤「収入のある仕事」になるんですけども、これが唯一3割を超えました。近年の定年延長等の動きもあり、今後はその値がさらに大きくなっていくのかなと思っております。

①から④、参加している割合が少ないんですけども、中でも④番の「地域の生活環境の改善・美化活動」については比較的参加している割合が多くなってまいりました。このような参加しやすい活動から入っていきまして、ここを入り口としてほかの活動にも参加しているといいのかなと思います。

ここまで、高齢者に関するデータを基に本事業の背景について説明いたしました。次のスライド、本事業の仕組みについての説明です。本事業は、「シニアが地域で活躍できる仕組みづくり」と「県民会議」の2本立てです。本日お越しの各圏域のシニア活動推進コーディネーターが地域の実情や課題を把握し、図のような様々な関係機関と連携するためのプラットフォームの役割を担い、シニアの社会参加活動を推進するために、地域に密着し、ときに圏域をまたいだ大きなスケールで、かつ、きめ細やかな支援を行っています。

シニアが地域で活躍できる仕組みづくりは、これまで同様ネットワーク会議やタウンミーティング等コーディネーターが中心となり、本日お越しの関係課や関係団体の皆様と様々な角度から連携して行っていくこととしております。

次に昨年度から始まりました総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン3.0」での本事業の位置づけについてです。基本目標を達成するための5つの柱である「誰にでも居場所と出番がある社会をつくる」の中に「高齢者の活躍の支援」が明記されています。元気な高齢者はもちろん、寝たきりになっても、障がいがあっても、どんな状態になっても居場所があり、出番があり、生き生きと生活できるような社会をつくれるよう、当課では高齢者の健康づくり、つながりづくりの観点から本事業を推進することとしております。

「誰にでも居場所と出番がある社会をつくる」という政策の柱の目指す姿には、「他者を認め、思いやり、共に支え合う共生社会が実現する」と明記されております。本事業ではシニアに焦点を当てておりますが、「誰にでも居場所と出番」がある社会とはシニアに限った話ではありません。年齢、性別、国籍、障がいの有無にかかわらず、誰もが個性や能力を発揮し、活躍する共生社会を実現させるためには、本日お集まりいただいている関係団体や関係課の皆さんと「協働」していくことが必要だと感じております。

最後に、近年の人生100年時代シニア活躍推進県民会議の振り返りです。

令和4年度の県民会議では「シニアの活躍」に関する事例発表を行いました。そして、「シニアの活躍」をどのように捉え、どのように実現させるかについて考えるワークショップを行い、「活躍」についてのイメージを広げました。

昨年度の県民会議では、フューチャーデザインに関するワークショップを行いました。30年後の将来について想像し、ありたい個人や地域、社会の姿について自分ごととしてとらえ、グループワークを行い、全体で共有を行いました。

最後になりますが、本日の会議の後には、少しでもシニア世代のことを自分ごととして捉えていただき、この高齢社会の中でシニア世代の活躍、生きがい、居場所づくりを少しでも意識して、皆様の事業等に取り組んでいただければと思っております。

簡単ではありますが、健康増進課からの説明は以上です。

○事務局

はい、どうもありがとうございました。それでは、ここから、トークセッションに入りますけども、ちょっと座を変えさせていただきます。

はい、それでは再開したいと思います。

ただいま、大澤さんから事業説明がありましたように、本日の県民会議のテーマは人生100年時代において、誰にでも居場所と出番がある共生社会。特に、地域において高齢者の活躍の場をどう広めるかということでもあります。

導入として、今日のゲストでいらっしゃいます、

(2) トークセッション

ゲスト：駒ヶ根市地域包括支援センター 安部 宏美さん

○事務局

それでは、ここから、トークセッションに入りますけども、ちょっと座を変えさせていただきます。

はい、それでは再開したいと思います。

ただいま、大澤さんから事業説明がありましたように、本日の県民会議のテーマは人生100年時代において、誰にでも居場所と出番がある共生社会。特に、地域において高齢者の活躍の場をどう広めるかということでもあります。

導入として、今日のゲストでいらっしゃいます、駒ヶ根からお越しいただきました安部宏美さんに、少しお話をお伺いしたいと思います。

よろしくをお願いします。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

よろしくをお願いします。

○事務局

安部さんは、お生まれは長野ではないですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

違うんですよ、私は山形県の、山形県の南陽市という、はい。

○事務局

何かテレビのニュースで見ました、南陽市。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

あ、ええ、そうですか。

○事務局

はいはい、ということで、山形大学の教育学部を出て。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです。

○事務局

そして、青年海外協力隊で行かれたということなんですが、何かスリランカとか、いろんなところを回られた。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、隊員としてはスリランカで2年間、2年と3カ月活動しまして、その間はちょっと主人とスリランカで出会ったものですから、日本人なんですけども、で、その後に主人のほうなんです協力隊のコーディネーターだったり訓練、日本では駒ヶ根に青年海外協力隊の訓練がありまして、そのスタッフだったりして、いろんな国、バングラデシュとかネパールとかに行っている。一緒に家族として行っていました。

○事務局

スリランカで結ばれちゃったんですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね。

○事務局

お仕事もされたんですよ。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

お仕事は、ちゃんとしましたので、はい、隊員が終わってからですね。

○事務局

はい。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

隊員終わって。

○事務局

そして、お連れ様のお勤めで、ネパールということで。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです。

○事務局

そのときは、協力隊ではなかった。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

主人は、JICAの駐在員で協力隊のコーディネーターだったんですけど、私は家族として、私と子供と一緒にいていった感じになります、はい。

○事務局

そして帰ってきて、駒ヶ根市の社会福祉協議会。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
そうです。社会福祉協議会に、はい。

○事務局
それで、ボランティアコーディネーターをされたと、ね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
そうです、はい。

○事務局
そして私と出会ったのは、長野県伊那保健福祉事務所の生きがい推進委員。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
そうでした。

○事務局
シニア大学の中にあるいきいき実践塾というのがありまして。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
そうです、はい。

○事務局
そこで、すばらしいコーディネート力を発揮していました。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
いえいえ、そうではないですけど、はい。

○事務局
そして、それを終えて、市役所勤務。駒ヶ根市役所勤務で現在に至るまではですかね、地域包括支援センター。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
はい。

○事務局
で、現在は認知症地域支援推進員ということで活躍。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
はい、そうです。

○事務局
そしてその間に、何か悲しいこともおありになったんですよね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうなんです。ちょっと私の人生が、こう変わってしまったということですかね。長男を5年前に過労自死で亡くしまして、本当に突然だったので、何のこう、幸せになるだろうと思っていた矢先のことだったので、こういうことが起こってしまったのが、ちょっと一番大きなことですね。

○事務局

それはまた、新たな活動のもとにもなられたということですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです、はい。

○事務局

後でまた、お聞きしたいと思います。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい。

○事務局

そして、そういうお仕事をしながら、様々な地域活動、ボランティア活動にも携わってこられたということで、宮田村に日本聴導犬協会というのがありましたよね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうなんです、近くだったので、家族で候補犬、聴導犬になる前の子犬の段階で基本的なしつけとか、人に慣れるとか、そういうところの子犬のところでは預かるボランティアを子供たちと家族一緒にしてました。

○事務局

そして、地球人ネットワーク in こまがねといういろんな国の人たちをサポートする活動。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、はい。

○事務局

はい、そこではどんな活動。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そこはですね、私が社協にボランティアコーディネーターだったので、地域にIターンで来た男性の方がですね、ここ外国人の人が多いので、私は外国人支援をするボランティアをしたいんですけど相談にいらした。それがきっかけで、その頃はそういったボランティアは駒ヶ根市になかったんですけども、係長とか私は本当に会ったばかり、4月になったらその方4月に来たので、訳が分からずどうしたらいいかなと思って係長に相談した。そしたら係長は、いやこれは懸案なんです。ここ数年、民生委員さんとかいろんな地域の方から相談があって、外国の人に触れて、ごみ出しとか、学校に行っていない子がいるとかそういうのがあったから、これは相談があったことだからということで、一緒に立ち上げて、今もコーディネーターやっています。

○事務局

今現在に至る多文化共生に付き合ってるわけですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、はい。

○事務局

そしてお仕事でやっていらした認知症地域推進委員から、認知症ケアサポートのおれんじネットフレンズ。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい。

○事務局

の、活動もされたんですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、認知症サポーターをね、要請していて、その方たちと一緒にボランティアグループを立ち上げて、私も会員として一緒に活動しているという感じです。はい。

○事務局

そして、また地域活動として、さっき言われた息子さんのね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね。

○事務局

グリーンケア。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい。

○事務局

で、それを立ち上げられたんですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね。

○事務局

それは、どんな活動をされたんですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

立ち上げたのは今年、グリーンケアという駒ヶ根市ですね、立ち上げたんですけども、やっぱり私が過労死、自死で息子を亡くしたのは公表したんですね。新聞とか。で、進行状況をお話ししたりとか、高校での啓発活動をやってたりとかこういうことをやっていたら、本当に地域の方

がうちもそうだったとか、御主人を亡くしたとか、自死で亡くした、事故で子供を亡くしたという方が話してくれたんですけど、それまで、何にも私には普通に一緒に活動していた人が、え、そんなことがあったのということで、そういう人が何人もいて、こんな身近でもあるということで、ああいう場がなかったんだなということで、その方から、もうここじゃなくて松本にそういう会に行ってるとか、東京に行ってるとか、あ、身近でそういうのがあればいいねという相談をちょっと亡くしたときに私の話も聞いてくれたりしたんですけども。

○事務局

なるほど。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そういうのを聞いていて、ちょっとそういうのが必要かなというふうに、自分も周りを見て思っていました。それで始めました。

○事務局

それは、いつ頃ですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

あの、会ですか。

○事務局

うん、会。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

始めたのは今年の6月なんですね。お話しはあったんですが、自分自身もちょっとこうやっばり、気持ち的に絶望があったり、私は労災を申請したりとか、会社との交渉、いろんなそういうことが和解がそっちのほうにエネルギーが必要だったんですけども、そういうのが解決しても心の悲しみというのとはなくならない。でもそれって私だけじゃなくて、本当はたくさんの方が、この長い人生の中でいろんな認知症になったとか、介護で大変だという人もいますんですけど、そういうのも一緒に、そういうのも一緒に悲しみと一緒に、でも生きているんだなというのが分かって、そういった分かち合いとかができるいいなと思って。

○事務局

いろんな気持ちを受け止めるというね。やっぱりそこをね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、何か共有したりとかですね、はい。

○事務局

はい、そして一番大きな活動としては、おれんじネットというのがあるんですけども、これはまさに今日のね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい。

○事務局

テーマとかぶっていくんですけども。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね。

○事務局

どんな活動をされているんですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

おれんじネットというのはですね、駒ヶ根市の取組なんです。認知症を知って地域で支え合うという、それを行政だけじゃなくて地域の方、企業とかいろんな関係団体、みんなで一緒に考えながら認知症とか、認知症になっても安心して希望を持って暮らせる地域づくりをしようという駒ヶ根市の取組をおれんじネットと呼んでいて、それは私の業務としてなっています。はい。

○事務局

具体的にはあれですかね、いろんな専門職であるとか企業であるとか、いろんな人たちが協同してという取組ですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです。そういうことです。ただ市がつくってやるというかみんなで一緒に考えて、駒ヶ根市の病院、認知症の疾患センターやこころの医療センターとかを回ったり、そういう方のところだとか、あと企業の福祉を考える。企業の会って駒ヶ根市にあるんですね。社協さんが事務局になっている、そういうところとかですね。はい、地域の皆さんとか、いろんなところとちょっと連携をしながら進めようというところです。

○事務局

そして今日は、ここではですね、多文化共生も含めて、共生というのが大きなテーマなんですけれども、そういう視点を見たときに、今日のテーマが人生100年時代シニア活躍推進のための共生社会をどうつくったらいいかということなんですけど、このお題をいただいたときに、どんなイメージをお持ちになりました。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

あの、私の問題だと思いました。私、シニアで、もう60過ぎてますので、これが自分のことで、本当に身近なことで、私の仕事とかをやっている、全部に関係ある自分ごとだというふうに思ったんですね、はい。

○事務局

活動していて、そしていろんなことが見えてきたり気づきがあったりしたと思いますけども、特にどんなことですかね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

気づいて、ちょっと初めですね、認知症サポーターというのを養成しても、何も活動してないとかね、オレンジリングというのがあるんでそれをもらって、もらったよと言ったら笑って言う方がいたんですけども、駒ヶ根市ですと登録をして支援につなげようというのを始めたんですね、

おれんじネット事業で。そうしてちょっと声をかけたら、こういうふうだね、認知症の方がここにいるんだけど、お話し相手に行ってくれないとか頼んだり、あと一緒にね、ボランティアに同行してくれないといった、結構皆さん、いいよと言ってやってくれて、すごく協力している人はこんなにたくさんいるんだというふうに思って、それも楽しんでというか、生きがいなのよと言ってやってくれる人があったり、あとそうやって個別に行くのが得意な人もいるんですけど、そういうのはちょっと向かないけど、こういうサロンとかでみんなと一緒にやるんだっただけだとか、人それぞれ、得意なこととかやりたいことが違うんだなというふうにちょっと思っていて、うん。あと何かこう、何せ私は地球人ネットワークというのをやって、日本語教室とか、その交流関係、外国の人とやってたら、そこは結構男性が多く来てくれていて、シニア層の方も結構多いんですね。

○事務局

多い。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

で、おれんじネットフレンズのお話しとかサロンとかいうと女性がほとんどで、女性の方が、大体女性のボランティアが多いなと思うんですけど、その地球人ネットワークの活動は、結構、退職した人の企業の人とか、いや海外赴任してたんだよとか、何かね、男の人が役割を持って来てくれる。そこは、今、高校生とかから、本当に90代の人だったり、すごく何か共生しているなという気がして、活動がですね、最初立ち上げたときには本当に10人だけで、自分たちのできるところからということだったんですけど、日本人だけだったんですけど、今は170人ぐらい、年会費を500円払ってくれた人がみんな会員という、数えているんですけど。そうすると、それぐらいの人が半分は日本人、半分は外国の人で、全部の活動じゃなくて、活動も広がってきたんですね、はい。

○事務局

地球人ネットワーク、ちょっといろんな国の人たちと、どう共生していくかということなんですけども、今日は農業分野の皆さんもいらっしやいますけど。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい。

○事務局

例えば、農業分野と地球人ネットワークって、ちょっとどう結びつくのかなと思いますけれども、何かあるんですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

あるんですね。実はですね、初めは料理教室とか語学の教室とでやってたんですけど、ダンスとか、ただベトナムからの研修生の方が畑を借りたいんだけど、畑会をやりたいんだけど、市役所の畑に申し込んだけど駄目だったということで、誰か貸してくれる人がいないかということを引き付けに、そしたら会員の中でおじいちゃんが亡くなって、その家と畑がいっぱいあるから、それを自分で何とかしてるから、そこを使って一緒にやればいねって言って声をかけたら、そのベトナムの人のほかにやりたい人を募ったら、結構たくさんいたんですね。そこで、共同でみんなで作るものと、あと自分は畑、この区画は自分のとって、ベトナムの野菜とか、フィリピンの人はこれとか、そういうのをやったら、その活動も始まったんですね。その活動には来

るけど日本語教室には来ないとか、活動によって、だから全部じゃなくて、自分がやりたいこととか、フィットしたものだったら活動ができるんだなと思って、それは日本人も同じで、日本語教室のほうは来るけど、そっちの畑のほうは来ない人とか。

○事務局

そういう関わり方もオーケーなんですね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

オーケーなんです。だから、畑にだけ来る日本人の人もいるし、そこで交流会をしたり、でも全員にラインでつながっているの、焼き芋大会、サツマイモをつくったのでやりますよと言うと、ふだん、畑に関わっていない人も来たりとか、何かそんな感じです。

○事務局

それとあれですか、過労死ね、息子さんがされたということがありましたけれども、これもいろんな分野の人たちが関わってくることによって、何か少しでも気持ちが和らいだりね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうなんです。私、本当にちょっと絶望というか、何で仕事のためにこんなことになるのというのが、で、まあ原因がいろいろあって、原因がいろいろだったらやっぱり過重だったということと、やっぱりシステムエンジニアだったんですけど、それはちょっと厚労省からの仕事、システム開発、それがもう決まっている。3月に決まっている。それもほかのところに請け負ったのが、やっぱり問題があって、その息子の会社に来た。やっぱり、発注の仕方の問題もあったり、あと企業はもうやんなきゃいけないというので、もういっぱいいっぱいになってしまって、その部署の人たちが、もうみんなが疲弊していたということもあって、多分、心配してたんだらうけど、ちょっとうまくそれが分散されてなかった。1人に重圧がいつてしまって、そういった働き方というのがすごく大切なんだっていうのが、そのことで思ったんですね。

働いていて、こう私がいいんですが、話をして内容。高齢者のお宅に訪問したときにですね、それまで結構、お母さんが認知症で御主人が介護していて、そうすると息子がね、仕事のこととちょっと鬱になってしまって家から出られないんだよという人が何人か駒ヶ根にもいて、仕事で具合が悪くなるっていう人、結構いるんだと何か思ってたんですね。でもそれって、やっぱり働き方の問題で、もうちょっとみんなが余裕があったりとか、きちんと働く人の権利とか、いろんなことを思わないと、働くことはすごく大事なことなんだなというのを思って、ワークライフバランスというのが、絶対これは働いている人だけの問題じゃないなというふうになんて思って、そういうところはみんなに、これは知ってもらわなきゃいけないと思ったんですね。認知症のこととか、多文化共生で私がやってきたことも、やっぱりやっている人だけが知ってても駄目で、みんなが知っていることによって、ちょっと変えなきゃいけないというふうに変ってくるから、これは広く考えなきゃいけない問題だなというふうになんて思いました。

○事務局

地域の人たちがね、そういうことをしっかり知るとというのが第一歩なんだけれども、それもやっぱり、市町村の行政だとか、県の行政機関も含めて、やっぱりお互いがそのことを共有できるような状況というのが必要だということが言えますかね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、はい。すごく思っていて、認知症のこととか、多文化教室とかやっていたんです

けど、その過労死のことも駒ヶ根市では、今年、いのちと健康を考えるシンポジウムというのをやってくれたんですが、自死の問題の啓発なんですけど、仕事の原因というのが多いので、私のことを私の課長ですね、今の保険福祉課の課長が知ってくれていて、これは大事なことだって、自殺問題っていてもやっぱり原因がいろいろあるし、勤務問題に特化したそういうシンポジウムをやるっていうので、10月に開催してくれて、本当に多くの方が来てくれたりして共感してくれたり、これは大事だねってこう言ってくれたので、そういったことをやっぱり超えて、分野を超えて知ってもらおうというので、そういう取組もあったんでよかったなって。

○事務局

まず知る。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです。

○事務局

ということですよ。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうです。

○事務局

そこから始まる、関係性もできていく。何かそういう活動をしていて、特に大事だなと思うことってどういうことですか。まさに安部さんは「つなぎ役」ですが根底には。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、やっぱり知るということですよ。知らないと始まらない。やっぱりジャーナリストの性被害とかいろんなことがあったように、ああいうことも知らなかったから何も問題がないと思ってただけの問題なんですけども、実は知られてない課題があったり、よく自死の問題とかいうのも、やっぱり言えない人が多いです。言わないと原因が分からない。じゃ、でも、私たちは原因が何なのかというのをやっぱり知らない、一緒くたではないので、そういったものをやっぱり知るということが大切だと思うので、そこからいろんな始まってって、それで活動をやらうとかいうと、そういう人とまた出会ったり。

○事務局

つながりますよね。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

つながれたんですね。いろんな方と、自死したその自死遺族の方とか、それをやっている応援してくれている弁護士さんとか、そういったことにつながったり、それをまた地域に私がつながったので、それをちょっと、今度は自分が地域でつなげていくというふうなことをやるので、やっぱり知る、出会う、それから、つなぐ、そうした何かつながっていく。私がつながることで、その後、その先の方が「こうだったよ」とかつなげて、広がっていくなというので、発信しないといけないな。

○事務局

発信するね、うん。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
そうですね、当事者なんで。

○事務局
当事者が。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
当事者が、そうですね。認知症もそうなんですけども、当事者がやっぱりなるべくね、当事者がいろんなことをやっぱり言っていけないとつながらないと思うので、できる人はそういったことでみんなが当事者が、いろんなことで皆さん当事者だと思うので、そういうことをつなげていく。はい。

○事務局
突然、戸田さん。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター
はい。

○事務局
戸田さんはね、長寿社会開発の主任コーディネーターでいらっしゃいますけど、今は何かコーディネーションのキーワードが浮かび上がってきたような気がするんですが、やっぱりこういう活動をしているうちに大事なことで何なんだろうって思うんですけど、どう。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター
そうですね、はい、はい。安部さんのお話をお伺いしてて、大事なことだなというのは幾つか安部さんの話の中に、やっぱり1人の相談や1人のつぶやきから事が始まっていくというのが1つと、あとやっぱり、人それぞれやりたいことが違うというね、そういう、そこがすごく大事にすることが、コーディネーションの大事なところと、もう一つは、今おっしゃった、やっぱり知ることが大事ということで、私たち長寿社会の各支部のタウンミーティングは、まさにそういう場を知る、知る場を提供していて、そうすると本当に出会ってつながっていく。次の言葉を待っているというようなことが非常に大事なキーワードだったかなと思いました。

○事務局
はい、ありがとうございます。そこで、今日の本題ですけども、人生100年時代における共生ということなんですけれども、これイメージとして何か浮かびますか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美
100年時代ですか。

○事務局
はい。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、やっぱり長いので、何か自分も世の中のまた一員となって、役割を持ってとかつながら持って、何か生きたいと思うんですね。でも、100年生きてれば、悲しいこともあったり健康じゃないときもあったり、ずっと死ぬまで健康な人はいなくて、本当に認知症のことをやっている、本当に誰でも本当に認知症になる可能性はあって、でも認知症になっても希望を持ってとかいうふうに思うと、やっぱり周りの環境とか、大丈夫だよというふうにみんなが思って、いろんな自然なサポートとかあったらいいし、やっぱり国籍とか文化とか、障害があってもなくてとか、いろんななくても何か自分の居場所があったりとか、つながる人がいたりとかいうことがいいかなというふうに思います。

○事務局

そして認知症になる、例え認知症になっても、その人はもうゼロになってしまうわけではなくて、その人の能力とかがあるわけですね。それに合わせてどういう場をつくるかというのがとても大事だと思います。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そうですね、はい。今、駒ヶ根でも、そのおれんじネットの事業で、最初は認知症の方を見守るとかサポートという意味合いだったんですけど、やっぱり本人とか家族の居場所とか、地域の一員となって一緒に活動できる場というのが一番大切なんだろうなというふうに思っていて、そういったものが駒ヶ根のほうでちょっと取組をはじめたら、それが何か発展して、初めはそういう認知症の方が一緒にできる場というふうにやったボランティア活動が、折り紙であったり編み物の場だったりするんですけど、それが、そこに集う人が、別に認知症じゃなくても来ていて、そうするとその場は認知症の人なのか何か全然分からない。でも皆さんが、あの心配だから連れてきたよというふうにして連れてきてくれる。それまでの相談は、公民館活動とかやっていて相談があったのは、あのですね、例えば、市民の教室何年やっているんですけどね、何かあの方、最近おかしんですよと言って相談に来る。そうすると、ちょっとおかしから、別の支援につなげたらいいんじゃないですかみたいな相談が多かったんですけど、そうじゃなくって、そういうのがあっても私たち一緒にやっていけるよとか、どうしたらいいみたいな、そういうふうなふうにちょっと変わって。

○事務局

きている。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

きている。そうですね、まあ全部じゃないけどそういうふうにみんながなっていけばいいなと思っています。

○事務局

それから、さっきお話ししたら、要するにこれは、退職後から考えるのではなくて、現役時代からということ何かさっきおっしゃってましたけども。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

そう、そうなんですね。実はですね、相談のこれ事実経験で、女性の方、結構人と交流がもとあるから、いろんなところにお茶会に誘っても来るんです。いらっしゃるんですけど、男の人は、いや、やっぱりいいとか、もう出ない人が多くて、それでやっぱり仕事だけやってきて、さあはい、地域の中に行ってくださいってなかなか出られないというのは、そうだよってみんな

言うし、やっぱりその気持ちも分かるので、でも、やっぱり自分がもともと囲碁のサークルやってきたよという人がいればそこにつながってたりするんですね。だから、その働き方をもうちょっと地域の中で企業としても考えてもらって、役割があるような、退職後からじゃなくて、もう働いているうちから地域と関わったり、ボランティア活動とかをしっかりと体験したり、だからそういうのが子供の活動でもいいんですけど、何かやってないと難しいな100年生きてと思いました。

○事務局

子供というと、戸枝理事長。

○戸枝理事長

うん。

○事務局

子供と随分、関わって来られてますけど、やっぱりシニアはシニアとしてだけ考えるのではなくて、子供との異世代間の交流みたいなのはとても大事だなと最近思うんですが。

○戸枝理事長

そうですね。やはり相互の関係という、フラットな関係で相互に学び合うというような形が、やっぱりとても見ていて気持ちのよいことで、私たちは子供たちの居場所だとか通信制高校とかやっているんですけども、退職した先生方がね、自分が現役時代に知っている先生を誘って誘って誘ってつながって、退職したら来てくれるというような、そんなサイクルで動いているんですけども、やっぱり子供たちから学ぶ。子供と話をしていられる、してる時間がとっても楽しそうだったり、何か密度の濃いマンツーマンの関わりが多いので、そういうことではお互いにとても楽しそうだし、子供が本当に生後間もないって私なんかは思うんですけども、13や15やそのぐらいで、何でこんなに苦しまなきゃならないのかなって思ったときに、大人たちは自分たちの責任としてこんな世の中をつくっちゃったなみたいな、そんなような思いも持ちながら、何かできないことはないかと思って、そんなすごく人間的ないい関わりができてあります。

○事務局

世代を超えてね、超えるっていうのが今日のテーマですけども、はい。

最後になりますけれども、安部さん、今日これだけ、何かいろんな分野のいろんな土俵でね。あるいは、いろんな機関の人たちが見えてるんですけども、今日の県民会議、何か期待することってどんなことですか。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

はい、やっぱりこういったいろんな分野の方が、こう1つの事を考えたりとかって大切だと思って、その私がやっている認知症施策でも、縦割りではなく全庁舎の部局のつながりを持ってとか、社会にとってなるんですけども、結局、市役所にいると、いやいや忙しくて。で、今まで一緒に認知症施策をやっていた人が別の部に行ってしまうと、ごめん忙しくてって言って、なかなかちょっと連携できない。できないというか、それやっぱり忙しいからというか、したくないわけではないということと、あと今日来るにあたって、ちょっと同じ課にいるその方の福祉課のほうの若い生活保護とかいろいろやってきた職員の方に聞いたら、そうなのよ、建設とか税務課になってもこっちの課にはなってほしいとか言って、分かってほしいというのがあって、自分は向こうが分かんないけどというふうな、でもどうしたらいいか、みんなそういう気持ちはあるんだ

けど、どうしたらいいか分からないから、ちょっとその仕組みとか、安部さん県のそういう会議に行くんだったら、その県でそういう取組をやって、それが、これがいい例よというのをちょっと示してほしいというふうに言われて、ぜひ、こういう取組とか本当に必要だと思うんです。今の社会では。そのだから、どうしたらいいかっていうのを県でやって、こういうふうにやったら、本当にこういうふうに連携できたよというようなことを具体的なことをやったらいいし、こんな会議をやれば連携できるよみたいなのをちょっと示していただけたらうれしいなと思います。

○事務局

プレッシャーを感じる。ありがとうございます。

それではですね、この安部さんのお話を聞いて、じゃあ人生100年時代をどう共生する。もう地域をつくったり仕組みをつくったらいいのかですね、みんなで考えてみたいと思います。

それでは、どうもありがとうございました。

○駒ヶ根市地域包括支援センター 安部宏美

ありがとうございました。

○事務局

ここからは、皆さんに向けてですけれども、どうでしょうね。これを聞いてみて、お、目が合った。どうだった聞いてみて。

○男性

いや、すごいですね、本当に感動したというか、やっぱり自分も、自分のことをちょっと思い出す場面もあったりするし。

○事務局

うん。

○男性

僕もう62なんですけど、やっぱりこれから先のことを考えたときにね、やっぱり相手のことも理解したり、自分も忙しくてできなかったこといっぱいあるけど、これから、だからまだまだね、今日のちょっと、今日初めてこういう会議に来たんですけど、ちょっと本当勉強させていただいて、本当に発信したい。

○事務局

発信したい。

○男性

うん。やっぱり自分の団地でも何かね、やらなくちゃってね、やっぱり思いました。本当に。本当に・・・・・・・・。

○事務局

生協だけではなくて団地でね。

○男性

そうそうそう。

○事務局

これが大事ですね。

○男性

そうです、そうです。はい。ありがとうございました。

○事務局

はい、どうですかね、はい。こちらの方。目が違うかなと思ったんですけど、はい。

○男性

もう僕自身、退職間近でかみさんから何か仕事しなくなったらうちにいますよねって言われるって、私、嫌ですよって。

○事務局

嫌ですって言われるの？待ってるわって言われたいの。

○男性

じゃあどうしなきゃいけないかなってというのは、ちょっと自分ごととして考えなきゃいけないかなというふうに思っています。

○事務局

自分ごととしてね、はい。

ありがとうございます。ということで、皆さんいろんな受け止め方をされたと思いますけれども、こちらはグループごとにワークに入ってきてほしいというふうに思います。

(3) 共生社会の実現について考えるワークショップ

○事務局

それですね、考える手順というかあれはですね、模造紙にポストイットを張りながら進めていくんですけども、まず安部さんのお話、提起された共生社会というね、いろんな形での共生がありますけれども、それをどんなふうに感じたのかということが1つ。それから、それぞれ部局や組織や団体を代表して来られておりますけれども、組織として何ができるだろうかというようなことを考えていただくのが2つ。そして、それぞれが単独で考えるのではなくて、先ほどから出ておりますけれども、連携して、お互いにこう連携して取り組んだときに、どんなこう、我々、いつも使っている化学反応って言うんですけども、連携することによってどんな新たな反応、化学反応が生まれるだろうかというようなことを中心に考えていただきます。そして最後、みんなそれを発表し共有するというところで時間いっぱい行いたいというふうに思います。

それではですね、それぞれの席にコーディネーター、これは長寿社会開発センターのコーディネーターが皆さんの御案内役としていらっしゃいます。コーディネーター、ちょっと手を上げてください。この皆さんが、各グループの御案内、水先案内人です。

それじゃあ、始めましょうかね。そして、ポストイットがありますけれども、ポストイット、少しくち分けますかね、それぞれ。黄色でいきましょう。ピンクは使いません。はい。

そして、もうすぐ皆さんのワークショップ慣れてきていると思いますが、前の紙に貼っていただくということでね、そしてそこに後で共有しますので、所属とお名前を書くということをルー

ルにしましょう。

まず第1です。そうね、メンバー、どういうメンバーがいるかというのをちょっと自己紹介から始めましょうね。各グループ、コーディネーターさん中心に、ちょっと簡単な所属とお名前を自己紹介をやって、それから入っていきましょう。

はい、お願いします。

はい、ぐるっと所属と名前だけでいっちゃいましょう。そして、その中でだんだんやっていきましょう。今、何をやってるかというのはちょっと置いておきましょう。

(ワークショップ)

○事務局

どんな話合いができたかということで、発表してもらう人の中で決めてください。

キーワード、キャッチフレーズ、よろしいでしょうか。そして、下のほうに参加した人の署名を入れておきましょう。名前をね。

はい、タイムで巻いております。発表者、決まりましたかね、それぞれ。誰にやってもらうか。

はい、いいですかね。

はい、それではいいかいAチーム、行ける。

○女性

いいです。

○事務局

じゃ、Aチームから行きます。皆さん、発表の仕方は、ここでみんなに見えるように、みんなに見えるようにかざします。そして、ここで発表してもらおうということでね。

○男性

何分あるんですか。

○事務局

2分です。

○男性

2分。

○事務局

持ち時間は2分。

○男性

持ち時間は2分。

○事務局

はい。

○男性

タイムキーパーは。

○事務局

タイムキーパーはいます。1分30秒、ゼロでいきます。

はい、拍手。これでいきます。

○教育委員会事務局生涯学習課 篠原主任指導主事

はい、Aグループ、もう2分計られました。Aグループです。私、県庁内の生涯学習課の篠原と申します。もともと教員です。

Aグループですが、キーワードがお互いが学び合い自分のできることをできるときにということで、それとサブテーマとして緩やかなつながりということで、緩やかなところがとてもいいのかなというふうに思っております。

お互いが学び合うというのは、例えば、ちょっとこの辺にあるんですが、研修の機会、学びの場の提供ですとか、あとは地域への啓発というところがお互いに学び合うという部分になります。見ていくと、やはりこう知るというものが1つのキーワードなのかなというように思います。相手を知るですとか、あるいは自分の周りを知ることが非常にキーワードなんですけど、1番は何だろう、気負わずにやっぱり緩やかなという部分ですね。できることを自分ができるときに、その部分がいいのかなというふうに思います。

最後は、ここに貼ってあるんですが、このような会議、今日のような会議が今後も必要だと思いますということで、ぜひまた来年度も、なかなかこのようないろんな業種の方と会うという機会は年に1回か2回ぐらいだと思うんですね。ですので、来年のこういう会議があると非常にいいのかなと思います。

Aグループは、お互いが学び合い、自分のできるときをできるときにということで、緩やかなつながりということで発表をさせていただきました。どうもありがとうございました。

○事務局

拍手、ありがとうございます。ぴったりですね、ありがとうございます。

じゃ、Bグループいきましょう。どなたが。

○女性

中谷さん。

○事務局

中谷さん、はい。

○長野県生活協同組合連合会 中谷事務局長

はい。

○事務局

はい、拍手。

○長野県生活協同組合連合会 中谷事務局長

はい、ありがとうございます。Bグループは、中谷、鷺尾、高橋、鷺尾、高橋、山岸、小林、和地のメンバーで考えました。

最初は受け止めですね、お話を聞いて、やっぱりみんな自分の足元のこととか、自分自身のこと。またその相手を思いやるとか、やっぱりそういうようなことを印象としては非常に持ちま

した。じゃあ何ができるんだろう、そのときにやっぱり連携していただくか、地域共生だから何かこうやっぱり協力し合うというふうなイメージがあったんですが、やっぱり最初に出会ったり、相手のことを知らないとながれないということがあるよね。で、やっぱりお話の中でも、いろんなところに出かけていったり声をかけたりしてつながる、出会う、出会ってからそこがつながって、つながったら相手のことが分かって、こういうことならできるんじゃないって、一緒に連携や協働ということが生まれてくる。そういう場をやっぱり持って行く。だから、自分の内側だけじゃなくて、外に声をかけたり呼びかけたり、そういう場の設定、その出会って相手を知ってつながるということを、やっぱり順繰りにどんどん、継続して回していかないといけない。じゃ、継続するには何かというと、やっぱり発信していく。だから、今日ここに来たのをこういうふうなのがあるよというふうにお聞きして、ここで出会った。で、相手のいろんな人がいるということが分かった。そしたら今度、それがまた一緒に何かできることがないかということを探しながらやったことをまた発進すると、それでまた新しい情報や出会いにつながっていくという。だから、私たちのキャッチフレーズとしては、出会い・知る・つながるということを発信をしながら継続していこうというようなことが、地域共生社会づくりの鍵になるのではないかというふうにまとめました。

以上です。

○事務局

ありがとうございます。

拍手。

○長野県長寿社会開発センター 佐々木推進員

長寿社会の佐々木です。よろしくお願いたします。

このグループはですね、感想としては、場の提供が大事だとか、人としての尊厳を守ることが大切、自分から動けること、習ったことをつなげていく、非常に多様、バイタリティーあふれる活動を年取ったらどうするかという感想の中から、自分たちは何がこうできるかというところで、まず1つは学びということで、シニアの生涯学習する場を提供する。シニアの出番、時間も、もしかしたらお金をもらおうとか、あと地域の中で自分の仕事を教えられていくとか、伝承していくかということが大切じゃないかなということもありました。

あと、伝承という中で、自分の技術ですね。社長さんは現役なんですけど、そこで働いている人は定年を迎えるということなんですけど、その中でも自分のこの技術とかをどう伝えたらいいのかということ。あと将来の不安、社会と関わりたい。あと仕事の喪失、シニアの生き方ということなんですけど、これも技術の継承と学びというのは、こんなところとつながりがあることで、おろそかにはできないということ。

あともう一つ、人を大切に「出番が」ということのキーワードがありまして、認知症本人が幸せになること。環境はつくれる、これは国でもあり、地域の中でもありということで、はい。これも農業支援ですね、サポーター制度もあるようですので、後継者をつくっていくのが大切かなということで、人と対する、出番も大切ということでした。

あと、キャッチフレーズですけれども、本人、これは個人になりますけど、個人の幸せのために人と情報がつながる。これはつながるだけではなくて、その伝え方、知る、知らせる、伝える。これは、本人のどういう要求、ニーズがあって、それを見つける方法をこちらが伝達しなきゃいけないし、その伝達方法もできるだけ多くの人に知らせられるような、知れるようなことをこちらでも努力が必要じゃないかなということでもとまりました。

○事務局

拍手。

はい、じゃみんなに見えるようにしてみましょか。

はい、拍手。

○男性

D班では、キーワードとしましては、まずは知り合う、出会うで、とにかくやってみるというようなキーワードとしてまとめました。

具体的に言いますと、まず知り合うということで、高齢者団体だけではなくて、例えば美容師さんとか、いろいろな団体さんがいろいろな思いを持っていて、そこをまず知ることから始めたほうがいいんじゃないかというところの部分と、あとは、個々のニーズ、いろいろな多様なニーズもありますし、何ですかね、いろいろな広い分野、共同な場づくりみたいなことも大事で、出会うことによっていろいろな意見、効果ができるというような部分が大事なんじゃないかな。で、共感をするというような場が大切なんじゃないかなというところがあります。

つながりをつくっていくというところの部分と、そのあと、とにかくやってみるというのは、例えば私、障害分野のところの関係なんですけれども、社会参加の場づくりとか、いろいろ具体的な部分につなげていって、とにかくあとは、公民館のところの活動の中で、例えば子供さんを挟むことによって、大人が生き生きするとか、いったような活動の場みたいなのができたらというところもありますので、まずはこういうふうな具体的などところを取り組んでいきたいというようにここでまとめました。

○事務局

はい。

最後になりました。はい。

最後のチームです、拍手。

○地域福祉課 徳永推進員

地域福祉課の徳永と申します。非常に濃い密度で話をしまして、2分じゃ足りないの、それもいかないですね。すいません。

私たちのほうは、安部さんのお話を中心にしてキーワードを出していくと、やっぱりつながることの重要性だったり、化学反応、大きさだったり、知る、お互いを知ったり、知らせること、自分からの発信も大事ですし、あとは話すことも大事だよねということがキーワードで出てきました。その中で、一言どなたかが言ったんですけども、じゃあこれをやっていくには何が必要なんだ、何をすればいいんだろうというところから、いやいや気楽に話せる場が重要だよねということになりました。はい。なかなか今、やっぱり気楽に話せる場というのは少なく、特にやっぱり、協議で何かを決めたりとか組織をしょってというふうになる会議が多いんですけども、やっぱり気楽に話せる場がないと、ここには結びついてこないなど。で、私たちのほうで出てきたキーワードが、Eグループなんで、E井戸端会議、ちょっと間違っちゃいましたけど苦しいですか。E井戸端会議という、みんなでフラットに気楽に話せることが最終的にはつながるきっかけになるんだろうなということで話をしました。

以上です。

○事務局

はい、各グループね、それぞれキーワードが出てきたし、何か非常に共通しているキーワードもありましたね。

ここからは、そのポイントを幾つか書いて、ちょっともっと見たいとかね、ちょっと聞きたい

というところを巡る時間を5分間だけ取ります。その前に、ピンクのあれを1枚、2枚でもいいですが、はい、皆さん持って。それで、はい、気になったところをこれいいねとかね、私たちのグループ、こことつながりたいとかね、そういうのがあったら書いて、そして自分の所属、名前も入れて、メッセージを置いて巡ってください。はい、どうぞ。プリーズスタンダップ。

自分のところには貼らない。人のところに貼る。はい、これいいじゃんっていうね。このキーワードいいじゃんってね。

○男性

このメモで自分の名前は書くんですか。

○事務局

自分の名前は書く、はい。所属と名前を書いてください。巡って歩いてください。

コーディネーターは、自分のグループの説明をする係でそこにいてください。あとの人たちは、どんどん巡ってください。

はい、どんどん巡ってください。あと2分ぐらいです。どんどん巡って行って、メッセージカードを置いて行ってください。ピンクです。

○女性

お名前は。

○事務局

お名前は、書いてください。ピンクのほうにね。

時間がなくてすいません。はい、そろそろ元の席にお戻りください。まとめのタイムに入りたいと思います。

コーディネーター、自分たちのグループにどんなメッセージが来ているのか、ちょっと目を通しておいてください。

はい、よろしいでしょうか。席に着きましょう。いいですかね、自分の席にお着きください。まとめのタイムに入ります。

Aのチーム、Aのチームにちょっと全員読み上げる時間はないかもしれませんが、どんなメッセージが残されていきましたか。

○女性

私たちのテーマ、ショートセンテンスが、お互いが学び合い、自分でできることをできるときに、そして緩やかなつながりというところだったんですけど。

○事務局

そこに来てるね。

○女性

そこに来てますね。

○事務局

緩やかっというところに来てるね。

○女性

無理はしなくて、できる範囲でっていうような、それから緩やかなっていうところがめっちゃいいねとか。

○事務局

めっちゃとは書いてねえぞ。

○女性

めっちゃいいねとか、そのできることをできるときにという、ここが一番大事だねというところ。

○事務局

大事だね、はい。

○女性

あと、現役世代を引退した方、プロフェッショナルな人たちも、今度はしゃべる側として活躍できるというところにもいいねっていうことで貼っていただいています。

○事務局

貼ってあります。はい、ありがとうございます。拍手。

Bのグループどうぞ、どんなものが貼ってますか。二、三、紹介してください。

○男性

まずは、出会って互いに知り合う、そしてつながっているいろいろ知り合う。そういうこの非常にいい循環が生まれてくると。

○事務局

循環がね、ああ。

○男性

そういうキーワードが。

○事務局

循環に来た。

○男性

はい。

○事務局

はい、ありがとうございます。

次のグループ。はい、どうぞ。

○女性

はい、多様な農業、経営者、介護、いろんな方が集まったんですが、結局は個人、本人の幸せ、個人の幸せとか本人のためというキーワードに感想が貼られました。

○事務局

本人の幸せのためっていうね。

○女性

本人の幸せのいろんなところがつながって、結局はその個人の人が幸せになることってすてきですよっていうメッセージをいただいたのと、そのための学びの場は、ハードルが、ハードルにならない学びの場は楽しいしすてきですねというメッセージをいただきました。

○事務局

はい、ありがとうございます。はい、拍手。
こっちから、はい。

○女性

Eグループなんですけども、キャッチフレーズの井戸端会議にすごく皆さん、井戸端会議にすごい。

○事務局

間違ったところにも貼ってあるね。

○女性

やっぱり気楽に話せて、まあ答えは見つからないけれども、その中に何かアイデアが生まれるんじゃないか。そういうような感じで楽しくみんなでわいわいと、そのときには答えが見つからなくても、その次につながるという、そんなような意見が多かったです。

○事務局

会議ではなくて、井戸端会議ね。

○女性

はい、井戸端会議です。

○事務局

じゃ、最後です。こちらどうぞ。
はい、拍手。

○女性

はい、Dグループですけれども、とにかく健康が一番だよっていうこと。その中でも、やっぱり出会いっていうのが大事で、そのときに出会いも大人だけではなくて、子供もまた介することで、そうすることによって、いろんな大人がさらにつながるかもしれない、そしてとにかく恐れずにやってみるとというのが前向きなメッセージでいいよねということでした。

○事務局

はい、拍手。すばらしい。
ということで、戸田さんにですね、はい、これ全体を見てどんなことが浮かび上がりました。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター

今、皆さんがおっしゃっていただいたように、今日は何か、やっぱり知り合う、出会うというキーワードだったんですが。

○事務局

そうですね。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター

やっぱり、世代も分野も超えて、さっき安部さんもいらっちゃって、国も超えてというところが、やっぱり超えるそして出会う、緩やかに出会うということがつながるし、もう一つやっぱり話す。

○事務局

話す。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター

最近やっぱり話すことが、多分少ないのかなと思って、やっぱり井戸端会議のように話すことが第一で、そこから何か生まれる。無理なく恐れずというサインもありましたが、そんな感じのキーワードでした。

○事務局

発信という。

○長野県長寿社会開発センター 戸田主任シニア活動推進コーディネーター

はい、発信もありました。はい。

○事務局

というようなことで、皆さんすばらしい、この短い時間の中で、めちゃくちゃなこのタイムスケジュールをつくったのは、この方です。

ということで、まとめていきたいと思うのですが、最後に田上さんですね。

じゃ、理事長、ちょっとどうですか、今日は。

○戸枝理事長

皆さんのこのワークショップの中で、もう始まっている。もうここで生まれているという感じがして、とても気持ちよく見させていただきました。

○事務局

うん、もう既にね。

○戸枝理事長

何か本当にやっていきたい、具体的に本当に一歩踏み出したいなと思います。

○事務局

具体的にね。

○戸枝理事長

はい。

○事務局

はい、ありがとうございました。

安部さんから聞きたいんですが、安部さんはもう今日、エジプトに向かって行かなきゃならないんで、新幹線にもう乗りにいきます。

最後、田上課長。

○健康福祉部 田上課長

皆さん、本日はお忙しい中、御出席いただき誠にありがとうございました。健康増進課長の田上でございます。

今回は、年齢とか、あと性別、障害があるかないかに関わらず、誰もがお互いに尊重し合い、生き生きとした人生を送ることができる共生社会という観点から、人生100年時代を考えて、これからのシニア世代の活躍の姿や推進に向けた取組について、御意見等をいただきました。

今回の県民会議のゴールは、共生社会について自分ごととして捉え、自分だったら、または自分の属する組織、団体だったら何ができるかを考えるきっかけとすることでした。県としても、いろいろワークショップ、意見を聞いて学びとか、あと子供などの他世代とか、あと気軽に話せる場の提供の重要性など、様々な分野の皆様の意見を聴くことができまして、大変勉強になりました。今後も、この県民会議で課題や方向性を共有しながら、シニア世代の幅広ますますの活躍を目指して支援できるよう、一緒に取り組んでまいりたいと考えていますので、引き続き、御協力のほどよろしくお願いいたします。

今日は、ありがとうございました。

○事務局

どうもありがとうございました。

少し時間が過ぎてしまいましたけれども、マイクを総合司会に戻します。

○男性

皆様、ありがとうございました。

それでは最後に、健康増進課から連絡がありますのでお願いします。

○健康増進課 大澤主事

すいません、本日はお手元にお配りいたしました黄色いパンフレットなんですけども、令和7年度のシニア大学の入学のパンフレットになっております。人生100年時代共生社会に向けて、シニア大学、すごい大事な役割を担っていると思いますので、ぜひ皆様、お近くのシニアの方々ですとか、業務で関わりのある団体ですとか、周知していただければなと思いますので、皆様よろしく申し上げます。

5 閉会

○男性

はい、ありがとうございました。よろしく申し上げます。

それではすいません、ちょっと時間がオーバーしてしまいましたけども、以上をもちまして、令和6年度人生100年時代シニア活躍推進県民会議を閉会いたします。

ありがとうございました。

